

大津市 歴史文化 基本構想

概要版

大津市教育委員会

 文化庁 平成 29～31 年度
地域文化財総合活用推進事業

発行年：令和元年 12 月
発行：大津市教育委員会
制作協力：株式会社スペースビジョン研究所／京都通信社
デザイン：納富進
印刷：谷印刷所

豊穰の淡海、緑濃き山々に抱かれた大津市は、 歴史文化遺産の宝庫です

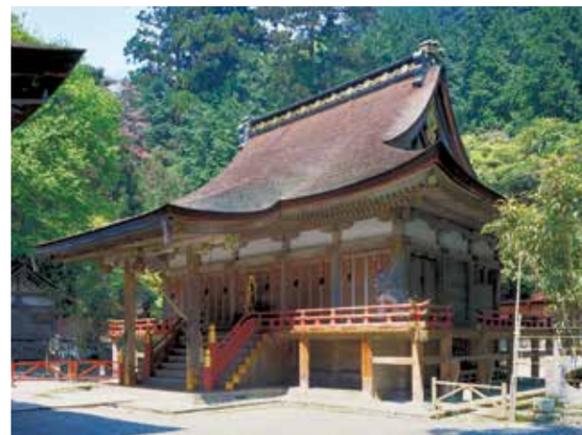
大津市には、世界遺産の比叡山延暦寺をはじめとする神社仏閣が点在し、国宝の絵画や彫刻などの美術工芸品も数多く所在しています。さらには、大津宮に代表される遺跡群、山王祭や大津祭などの祭礼、坂本の町並みなど、大津市の成り立ち、信仰、生業と深く結びついた多種多様な歴史文化遺産*が大切に受け継がれてきました。国や県、市から文化財に指定等を受けている歴史文化遺産は671件あり、未指定の歴史文化遺産も数多く伝えられています。

これほど多くの歴史文化遺産が長きにわたって守り継がれてきた背景には、大津市が、日本最大の淡水湖である琵琶湖の恵みを受け、古くより湖上交通の要として機能し、街道の宿場町として繁栄を極めてきたことが挙げられます。

いっぽうで、「未来への継承」という点では課題もあります。生活様式の変化、深刻さを増す後継者不足、管理体制の問題などから、多くの歴史文化遺産が存続の危機に瀕しています。歴史文化遺産は、大津市のアイデンティティの核となる大切

な宝物です。この危機を見過ごすことはできません。大津市の歴史文化遺産を確実に保存し活用するために、どのようにすべきでしょうか。

大津市は、その総合的な指針となる「大津市歴史文化基本構想」を策定し、みなさんとともに考えていきたいと思えます。



日吉大社西本宮本殿

過去から現在、未来へと、悠久の時を紡ぐ、 6つのテーマと15の物語

「大津市歴史文化基本構想」の策定にあたっては、大津市の歴史文化遺産の全容を知ることから始めました。歴史文化遺産を洗い出し、山と湖に面した大津市の立地や土地利用の歴史、自然環境の変化や地域の歴史、歴史文化遺産の現状と保存や活用の取り組みなど、さまざまな角度から考察し

てみると、6つのテーマが浮かびあがってきました。キーワードは「遺跡」、「信仰」、「琵琶湖と暮らし」、「道」、「自然」、「文学」です。

歴史文化遺産は、「過去の遺物」ではありません。この大津市に蓄積される「時間」そのものです。時代を超えて語り継がれる「物語」に似ているかもしれませんが、歴史文化遺産は、その時代の暮らしに息づき、磨かれてこそ、輝きを増します。その価値を未来につなぐことに意味があるのです。

大津市の歴史文化の特徴、価値を市民のみなさんと共有し、その価値をわかりやすく伝えるために、6つのテーマごとに、それぞれに関連する文化財群の魅力に注目し、「15の物語」を紡ぎました。多種多様な歴史文化遺産をストーリーだててとらえ、市民のみなさんとともに、大津市の歴史文化の保存・活用策を、より効果的に推進したいと考えています。

*歴史文化遺産：指定等の「文化財」のみならず、暮らしのなかで守り、育み、受け継いできた歴史的・文化的・自然的遺産の総体。

大津市の指定等文化財の内訳

(令和元年6月1日現在)

種別		国		県		市		計
		指定	登録	指定・選定	指定・選択	指定	登録	
有形文化財	美術工芸品	建造物	62 (9)	128	11	21	0	222
		絵画	59 (3)	0	13	22	0	94
		彫刻	95 (3)	0	9	27	0	131
		工芸品	23 (3)	0	11	9	0	43
		書跡等	53 (17)	0	12	10	0	75
		考古資料	8 (1)	0	7	8	0	23
		歴史資料	5	0	3	5	0	13
無形文化財		0	-	2	0	-	2	
民俗文化財	有形民俗文化財	0	2	3	6	2	11	
	無形民俗文化財	1	-	5	5	-	11	
記念物	史跡	15	0	1	10	0	26	
	名勝	5	0	4	1	2	12	
	天然記念物	2	0	0	4	0	6	
伝統的建造物群	重要伝統的建造物群保存地区	1	-	0	0	-	1	
文化的景観	重要文化的景観	0	-	-	-	-	0	
文化財の保存技術	選定保存技術	1	-	0	0	-	1	
計		330	132	81	128	132	671	

※国指定の有形文化財の()は国宝指定の数(内数)



テーマ3 琵琶湖と暮らしを めぐる 歴史文化

- ⑦ 水運とともに歩む町
- ⑧ 水城と町の繁栄
- ⑨ 琵琶湖の暮らしと生業



テーマ4 道でつながる 歴史文化

- ⑩ 東海道と大津宿
- ⑪ 北国との交流の道
- ⑫ 山越の道と参詣の道



テーマ5 自然とともに つくる 歴史文化

- ⑬ 水と技
- ⑭ 里山の暮らしと生業



テーマ6 文学につづられる 歴史文化

- ⑮ 歌と物語



テーマ1 遺跡が語る 歴史文化

- ① 原始・古代の暮らし
- ② 渡来人の足跡
- ③ 大津宮と近江国府



テーマ2 信仰が 生み出した 歴史文化

- ④ 鎮護国家と仏教文化
- ⑤ 浄土信仰の展開
- ⑥ 祭礼文化と庶民信仰



百穴古墳群 (滋賀里町甲)



テーマ1 遺跡が語る歴史文化



一老坊遺跡出土の袈裟襷紋銅鐸 (石山寺提供)

大津市内に数多くある先史時代から古代にかけての遺跡は、大津市の成り立ちを物語っています。旧石器時代の真野遺跡、縄文時代の滋賀里遺跡は、湖岸で生活した人々の暮らしを私たちに伝えてくれます。弥生時代になると、高地などにも集落がつくられるようになり、古墳時代には、皇子山古墳をはじめ、茶臼山古墳、曼陀羅山古墳群など、いくつもの古墳が築造されました。また、渡来人とかかわりの深いミニチュア炊飯具や大壁建物も発見されています。7世紀には天智天皇が大津宮に遷都し、崇福寺などの寺院が築られました。奈良・平安時代には瀬田地域に近江国府が置かれ、律令国家の拠点として繁栄していきます。

1 原始・古代 の暮らし

●人々の生活のはじまり — 旧石器時代

黒曜石やサヌカイトで作られた旧石器が真野遺跡や蛭谷遺跡から出土しており、旧石器時代から大津市に人々が暮らしていました。

●集落の形成 — 貝塚・墓地、縄文時代

石山貝塚や粟津湖底遺跡は、日本最大規模の淡水産貝塚です。琵琶湖や河川で獲れる魚介類のほかに鳥や獣、木の実なども数多く出土しており、人々の暮らしを支えていたことがわかります。また、滋賀里遺跡では、縄文人のお墓が数多く発見されました。

●新しい文化 — 稲作・銅鐸・方形周溝墓、弥生時代

弥生時代には稲作が伝わり、南滋賀遺跡では石包丁が出土しています。また、弥生時代のお墓である方形周溝墓が西日本で最初に見つかったのも南滋賀遺跡です。一老坊遺跡からはお祭りに使われ



曼陀羅山古墳群 (緑町)



真野古墳出土埴製舟形容器 (大津市埋蔵文化財調査センター保管)

た銅鐸が出土しました。この時期の遺跡からは近江の特徴を持つ土器だけでなく、北陸や山陰、東海地方の各地の土器も発見され、広い地域での交流があったことがわかります。

●いろいろな古墳 — 古墳時代

古墳時代前・中期には、和邇大塚山古墳に代表されるように、琵琶湖を望む丘陵地に地域の有力者の古墳が築られました。真野古墳では、鉄製の武器や農耕具などが出土しています。古墳時代後期には群集墳が築かれるようになり、百穴古墳群など渡来系の特徴を持った古墳群も現れてきます。

2 渡来人の 足跡

●渡来人の集落

古墳時代には、朝鮮半島や中国大陸から多くの人々が渡来し、坂本から錦織周辺で暮らしていました。穴太遺跡や滋賀里遺跡では渡来人の技術で作られた大壁建物やオンドル状遺構などが見つかり、渡来人の集落があったと考えられています。

●墓制と葬送儀礼

渡来人たちは、坂本から錦織地域で多くの古墳を築造します。穴太野添古墳群や百穴古墳群などは、天井がドーム状の横穴式石室で、百済との類似性が見られます。石室内にはミニチュア炊飯具などの副葬品が納められました。一方、堅田・真野地域の春日山古墳群などの石室は天井の平らな横穴式石室で、鉄刀などの武器や馬具が見られることから、在地の豪族のものと考えられています。古墳時代の人々が地域を分けて暮らしていたことがわかります。

●渡来文化の影響

古墳時代後期に伝播した渡来文化は後の時代にも影



太鼓塚古墳出土ミニチュア炊飯具 (大津市埋蔵文化財調査センター保管)



穴太遺跡出土のオンドル状遺構

響を与えました。古代三大橋のひとつに数えられる勢多橋は渡来人の技術を使ってつくられたものとされています。大津宮と関わりの深い穴太廃寺や崇福寺などの建築にも渡来人

の技術が使用されました。また、渡来人は、仏教の興隆にも深く関わっています。延暦寺を開いた最澄や石山寺を開基した良弁は渡来人の子孫です。

3 大津宮と 近江国府

●国家存亡の危機

激動する東アジア情勢を鑑み、中大兄皇太子は中臣鎌足(藤原鎌足)らとともに、天智天皇6年(667)に近江に都を移しました。わずか5年の宮でしたが、近江令の制定、庚午年籍の作成、漏刻の設置など、律令国家の形成に大きな役割を果たしました。

●近江大津宮と古代寺院・生産遺跡

遷都の翌年、中大兄皇太子は即位し、天智天皇になります。錦織遺跡の発掘調査で巨大な掘立柱の門と回廊などが発見され、大津宮の所在地が明らかになりました。大津宮の時代、南滋賀町廃寺や崇福寺、穴太廃寺、園城寺前身寺院など多くの寺院が建立され、仏教文化が開花します。また、瀬田丘陵の山ノ神遺跡では須恵器が大量に生産され、寺院建築に欠かせない鴟尾も焼かれました。

●近江国府の位置

奈良時代、瀬田地域に近江国府がおかれしました。その推定範囲は1km四方で、四隅には若松神社、建部大社などの神社が見られます。域内で多くの人々が暮らしていた痕跡が発掘調査で明らかになっています。

●近江国庁と関連遺跡

近江国府の南辺中央には近江国庁が置かれていました。これはいまの県庁にあたる施設です。平城宮・平安宮に似た構造をしており、律令国家を推し進める一大拠点でした。周辺には、国庁に伴う官衙群として、勢多駅と考えられる堂ノ上遺跡、国司館に推定される青江遺跡、大倉庫群であったと考えられる惣山遺跡などがあります。また、天平宝字3年(759)には瀬田川西岸に藤原仲麻呂が保良宮を造営しました。



南滋賀町廃寺跡出土方形蓮華紋軒先瓦 (近江神宮蔵)



大津宮復元模型 (大津市歴史博物館蔵)



山ノ神遺跡出土鴟尾 (大津市蔵)



近江国庁跡出土飛雲紋鬼瓦 (滋賀県蔵)



延暦寺根本中堂



テーマ2 信仰が生み出した 歴史文化

大津市では、さまざまな信仰によって歴史文化が形成されてきました。延暦寺、園城寺（三井寺）、石山寺、日吉大社など寺社の信仰から生み出された歴史文化は大津市の歴史を語る上でも欠かせないものです。西国三十三所観音巡礼など、寺社は庶民の信仰にも密接に関わってきました。大津市を代表する曳山祭礼の大津祭、勇壮な神輿の祭礼である日吉大社の山王祭や建部大社の船幸祭をはじめ、栗原の八朔踊りや葛川明王院の太鼓まわしなど信仰に基づく祭礼や行事が一年を通じて市内各地で行われています。また明治時代以降、キリスト教の建造物が建築されており、これも信仰が生み出した歴史文化遺産のひとつと言えます。

4 鎮護国家と 仏教文化

●鎮護国家の寺——延暦寺
最澄によって開かれた延暦寺は、国家の安泰を祈る寺として、皇室や貴族たちの崇敬をうけました。東塔、西塔に加え、3代座主円仁によって横川が新たに開かれ、18代座主良源の時代に三塔十六谷と呼ばれる寺域体制が整えられました。平成6年（1994）には、「古都京都の文化財（京都市・宇治市・大津市）」として世界遺産に登録されています。



園城寺金堂



石山寺多宝塔

●日吉大社と坂本

日吉社（現、日吉大社）は延暦寺の鎮守として、繁栄していきました。日吉大社のある坂本のまちは、比叡山山麓に位置して山上の寺院を支え、現在は里坊のひろがる町並みが重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。また、室町時代の下坂本は琵琶湖水運や京都への陸路運搬の拠点として目覚ましい発展を遂げました。

●四箇大寺のひとつ——園城寺（三井寺）

長等山全体を寺域とする園城寺は、円珍が再興し、貞観8年（855）に天台別院となります。その後、円珍門徒が園城寺に移り、寺門派と呼ばれるようになりました。東大寺、興福寺、延暦寺と並び「四箇大寺」として国家の祈禱所となります。

●学問の寺——石山寺

石山寺は良弁を開基とし、奈良時代には保良宮の鎮護の寺として整備が進められました。平安時代になると、皇族・貴族の信仰を集め、紫式部がこの寺で『源氏物語』を執筆したという伝承も生まれます。また、石山寺は膨大な経典や聖教を伝える学問の寺でもありました。

5 浄土信仰 の展開

●延暦寺と浄土信仰

死後に仏・菩薩の国土への往生を説く浄土信仰は、平安時代、延暦寺横川の源信が「往生要集」を著し、念仏の重要性を説いて庶民へと広まりました。延暦寺の浄土教の流れはやがて法然・親鸞を生みます。そして、真盛は西教寺を拠点に称名念仏の励行という信仰のあり方を見出し、天台真盛宗の基礎を作りました。

●蓮如と大津

15世紀、本願寺第8世の蓮如は近江の布教に重点をおき、その拠点のひとつが堅田の本福寺でした。応仁2年（1467）、室町幕府の命による「堅田大責」のあと、蓮如は園城寺の庇護を得て近松御坊に移り、布教活動を続けます。大津市には堅田源兵衛の首、身代わりの名号石、犬塚の櫓など、蓮如にまつわる伝説が多く残されています。



西教寺本堂

●諸宗の進出と京都からの疎開

15世紀の大津市では、禅宗や浄土真宗、曹洞宗の寺院が建立されるようになり、堅田の浮御堂（満月寺）が臨済宗へ転宗するなど、諸宗の進出が目立ちました。また、応仁の乱の戦禍を逃れて、浄土宗の知恩院が伊香立へ逃れたり、法勝寺の本尊が西教寺に移されたりするなど、大津は京都からの疎開先となります。知恩院の疎開先である伊香立には、その後、新知恩院が建立されました。



新知恩院

6 祭礼文化と 庶民信仰

●山王祭と大津祭

日吉大社の山王祭は3月上旬から4月中旬にかけて行われる大津を代表する神輿祭礼です。午の神事や宵宮落し、船渡御、粟津の御供など、多くの行事が行われます。その規模は、坂本だけでなく膳所や大津市外に及び広域なものとなっています。10月に行われる天孫神社の大津祭も大津を代表する曳山祭礼です。大津祭は、絢爛豪華な懸装品に装われた13基の曳山が市内を巡行し、巡行中各所で演じられるからくりが特徴です。

●四季の祭と正月行事

大津市には、五箇祭や和邇祭など神輿渡御を中心とした春祭りが多いですが、夏には建部大社の船幸祭、秋には滋賀里の八幡神社祭礼や今堅田の野神祭などが行われています。1月には、下坂本の酒井神社・岡社神社のおこぼまつりや尾花川の蛇の顔見せなど多彩な正月行事を見ることができます。

●西国三十三所観音巡礼

西国三十三所観音巡礼は平安時代後期に生まれ、15世紀には庶民へと広まり、江戸時代になると参詣者が増えました。大津市内には第12番札所岩間山正法寺、第13番札所石山寺、第14番札所園城寺観音堂の3つの札所があり、石山寺には、室町時代に関東の巡礼者が納めた巡礼札が残っています。

●キリスト教の布教と教会

明治時代、アメリカ人のヴォーリーズによって設計された日本基督教団堅田教会、同大津教会愛光幼稚園をはじめ、市内にはキリスト教に関わる建築物が現存します。



山王祭



大津祭（大津祭曳山連盟 提供）



船幸祭



堅田の浮御堂



テーマ3 琵琶湖と暮らしを めぐる歴史文化

水陸交通の要衝であった大津のまちは、平安時代以降、京都の東の玄関口としての地位を確立し、大津や堅田、下阪本は琵琶湖の水運と結びついて繁栄しました。安土・桃山時代には、坂本城、大津城、膳所城の3つの水城が湖岸に築かれ、その城下町は現在の市街地の礎となりました。近江の民は琵琶湖をウミと呼び、丸子船（丸船とも呼ばれる）と名づけた特徴的な和船を駆使して物資を輸送し、アユやフナなどの湖魚を独特の調理法で加工して豊かな食文化を育みました。多くの恵みをもたらす琵琶湖は、まちの成り立ちや人々の生業とも深く結びついて、特色ある歴史文化を醸成してきました。



小舟入の常夜灯（中央四丁目）

7 水運とともに 歩む町

●琵琶湖の港に由来する大津

古代より大津は平安京の東の外港となり、安土・桃山時代には、大津築城と大津百艘船の創設によって琵琶湖水運の中心地として発展します。江戸時代になると、東海道最大の宿場町として賑わい、「大津百町」と呼ばれました。また、米をはじめとした多くの物資が集まる港町でもあり、水陸交通の要衝として繁栄します。小舟入に残る常夜灯は、かつての湖岸線を示す貴重な資料です。

●「諸浦の親郷」堅田

平安時代中期には下鴨社の御厨（神への供物を献上した領地）が置かれた堅田は、中世には漁業や水運に絶大な力をふるいました。江戸時代には



居初氏庭園（本堅田二丁目）



関津浜常夜灯（関津一丁目）

「諸浦の親郷」と呼ばれ、琵琶湖のすべての港に自由に入出りできる権利を持っていました。今も環濠の名残を伝える堀割が残り、琵琶湖を借景とする雄大な居初氏庭園などを見ることができます。

る堀割が残り、琵琶湖を借景とする雄大な居初氏庭園などを見ることができます。

●三津浜と湖岸の村々

平安時代、下阪本（浜坂本）には三津浜と総称される今津・戸津・志津の港が開かれます。三津浜に着いた荷物は山中越から京都へと運ばれていきました。江戸時代には、北部地域の湖岸の村々でも船稼ぎが行われており、瀬田川にも川舟が就航していました。北比良や関津にはいまでも常夜灯が残されています。

8 水城と 町の繁栄

●まぼろしの坂本城

織田信長は延暦寺の押さえと京都への交通路確保のために、明智光秀に命じて湖水を引き込んだ坂本城を築きました。本能寺の変後に落城しますが、その後再建され、天正14年（1586）に廃城となります。坂本城の場所は長らく不明でしたが、発掘調査によって東南寺の東側湖岸で発見されました。琵琶湖水中には石垣の一部が残り、聖衆来迎寺の表門は坂本城から移築されたものです。



聖衆来迎寺表門

●水運の拠点となった大津城

坂本城が廃城となり、陸路・湖上交通の要衝である大津に城が移されました。大津築城と同時に大津百艘船と呼ばれる船仲間が組織され、江戸時代以降も特権が認められます。大津城は京阪電車のびわ湖浜大津駅周辺が本丸にあたり、石垣や礎石建物、石組みの溝やかまどなどの遺構、金箔瓦などの瓦類や土器類が発掘調査で見つかっています。

●大阪・京都の押さえ膳所城

関ヶ原合戦後、徳川家康の命により、琵琶湖岸に膳所城が築かれました。坂本城、大津城と異なり、膳所城は東海道の防備を重視した城で、軍事上の要害として琵琶湖を利用していました。しかし、その姿は近江八景の「粟津晴嵐」にも描かれる美しい城だったと言います。本丸跡は膳所城址公園として整備され、いくつかの城門が城下の神社等に移築されています。



大津城跡出土瓦（大津市埋蔵文化財調査センター保管）



「近江八景図屏風」に見える膳所城（大津市歴史博物館蔵）

9 琵琶湖の 暮らしと生業

●琵琶湖の漁業

琵琶湖では縄文時代から漁業が行われており、鎌倉から江戸時代の堅田は漁業における特権を持ち、現在も琵琶湖最大の漁業基地です。琵琶湖の漁法は、河川での築（網代）、湖岸の魩に代表され、小糸網など船を駆使する漁法も盛んです。タツベやモンドリなどの竹製漁具を使った沿岸部での漁は、農業の副業として行われていました。

●琵琶湖が生み出す食文化

江戸時代、琵琶湖でとれる大津の名産として堅田煎鯰、鱮魚、鮒、鯉、鰻鱺魚、勢多蜆、宇治丸鮓が育ちました。なかでも、塩漬けのフナと飯を合わせて自然発酵させるフナズシは近江の食文化を象徴する逸品です。勢多蜆は古くから琵琶湖周辺の人々の栄養源として食卓に上り、石山寺門前ではシジミ飯が名物として売られています。

●琵琶湖の船

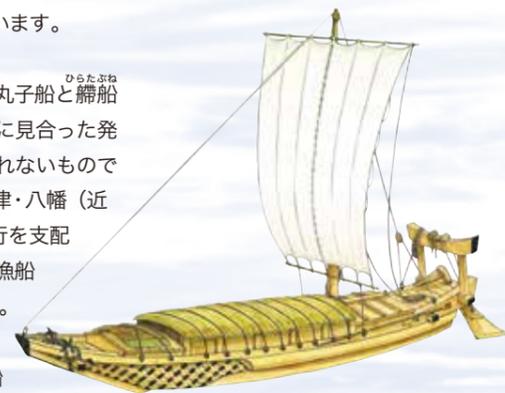
江戸時代の琵琶湖には、木造和船の丸子船と船船が通っていました。丸子船は淡水湖に見合った発達を遂げた船で、琵琶湖でしか見られないものです。幕府の庇護のもと、堅田・大津・八幡（近江八幡市）の3つの浦が丸子船の運行を支配していました。船船は沿岸や内湖で漁船や田船として用いられてきた船です。江戸時代、彦根藩領以外では大津と今堅田の船大工のみがこれらの船を建造することが許されていました。



琵琶湖の漁撈用具及び船大工用具（滋賀県教育委員会提供）



フナズシ



丸子船（『琵琶湖の船—丸木舟から蒸気船へ—』より）



瀬田唐橋



テーマ4 道でつながる 歴史文化



逢坂山関址碑 (大谷町)

京都から東国へ通じる東海道、北国につながる北国海道（西近江路）、若狭につながる若狭街道など、京都をはじめ東国・北国各所と街道でつながった大津市には、人や物資の往来のなかで育まれた多様性と地域の個性を感じられる歴史文化があります。これらの街道は、白鬚神社や葛川明王院などへの参詣道でもありました。道中には行き先を示す道標が建てられ、大津や下阪本では、街道筋の町並みが残り、東海道や北国海道の古道を感じることができます。

10 東海道と 大津宿

●東国への関門——逢坂山

東海道の逢坂山は平安時代には関所が置かれた場所です。江戸時代、大津から京都に荷物を運ぶ際の難所であったところから、荷物を積んだ牛車のために車石が敷かれました。

明治時代になると逢坂山には日本人技術者のみの手によって旧逢坂山トンネルが開通し、鉄道が走ります。逢坂山につくられた京阪電車の逢坂山隧道（大正元年）、JR東海道線の蟬丸跨線橋（大正10年）は今も現役です。

●東海道53番目の宿場——大津宿

大津宿は東海道最大の宿場で、本陣、脇本陣のほか、大津代官所や幕府の御蔵、諸大名の蔵屋敷が置かれ、琵琶湖の港町、園城寺（三井寺）の門前町でもありました。東海道と北国海道（西近江路）



『木曾海道六十九次之内大津』(大津市歴史博物館蔵)

が分かれる札の辻は宿場の中心で、近代には大津市の道路元標が置かれました。大津宿は「大津百町」と呼ばれる100の町からなっており、いまでも多くの町家が残っています。

●交通の要衝——瀬田唐橋

瀬田川は古くより軍事・交通の要衝であり、壬申の乱や源平の争乱、南北朝の内乱など、しばしば合戦の舞台になりました。瀬田川唯一の橋であった瀬田唐橋は、現在はコンクリート製となっていますが、欄干の擬宝珠には江戸時代に幕府の命により膳所藩が架け替えたことを示す刻銘が残されています。また唐橋は、倭・藤太伝説や近江八景「瀬田夕照」の舞台にもなっています。

11 北国との 交流の道

●湖岸を進む北国海道

米原から琵琶湖東岸を北上する「北国街道」（東近江路）に対して、西側は「北国海道」（西近江路）と呼ばれ、点在する道標にその名が刻まれました。下阪本や宿場町であった和邇・木戸・北小松には、街道の名残をとどめる古い町並みが残っています。和邇中と和邇今宿の境界に位置する交差点にはかつて榎が植えられており、一里塚の跡であったとも言われています。

●北国海道の名勝

北国海道は、名勝が多いことが特徴で、近江八景



唐崎神社

の「唐崎夜雨」や「比良暮雪」の舞台にもなっています。近江舞子は古くは雄松崎と呼ばれ、天皇即位後の大嘗祭の屏風歌に詠まれたほどの名勝でした。北小松の西北にある「楊梅の滝」も古くから名勝として知られ、比良山にまつわる天狗の伝承も残っています。

●谷間を進む若狭街道

若狭街道は京都と若狭を結ぶ最短ルートであり、葛川明王院へ向かう道です。近年では、若狭でとれた鯖を京都へ運んだ街道として、鯖街道

とも呼ばれています。若狭街道の難所である花折峠は、明王院への参詣者が松を手折ったところからその名が付けました。葛川の中心は葛川坊村町の明王院と地主神社で、参詣道は昔ながらの面影を伝えていきます。



明王院への参道

12 山越の道と 参詣の道

●官道に準じる「田原道」

江戸時代に宇治田原越と呼ばれた街道は、古代より大津と平城京をつなぐ主要ルートで、古くは「田原道」と呼ばれました。近年の発掘調査の結果、主要官道にも引けをとらない立派な道だったことが判明しました。平安京へ遷されてからも、大津から宇治、奈良への間道として重視された街道のひとつです。

●比叡山を越える道

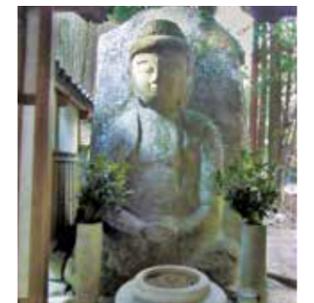
平安時代には、比叡山を越えて京都と大津市を結ぶ道がいくつも見られました。京都の北白川に至る山中越は、「志賀の山越」、「志賀の今道」など歌枕のひとつになり、室町時代には主要な交通路となりました。滋賀里の集落や山中町の西教寺には、道中の安全を祈願したものとされる石仏が残ります。このほかにも伊香立越、仰木越、白鳥越などの峠道がありました。

●参詣道と道標

坂本からの「本坂」、京都修学院からの「雲母坂」は、延暦寺への表参道です。寺院への参詣道は、京都鹿ヶ谷から如意ヶ岳を越えて園城寺（三井寺）に至る「如意越」、国分から牛尾観音への参詣道である「牛尾越」、石山寺から岩間山正法寺を経て醍醐寺へ至る西国三十三所観音巡礼の道「岩間越」、田上の不動寺へ参詣する「不動道」などがあります。これらの道中には参詣者のために道標が建てられ、いまでも市内各所に残っています。



「田原道」跡 (滋賀県教育委員会提供)



志賀の大仏 (滋賀里町甲)



岩間山正法寺



オランダ堰(上田上桐生町)

テーマ5 自然とともにつくる 歴史文化

「近江八景」に象徴されるように、琵琶湖の景観は古くから人々に親しまれてきました。一方で、自然はときに災害をもたらします。人々は、度重なる洪水を防ぐために堰や堤を築いたり、川底の土砂を浚え、土砂流入を防ぐ砂防ダムを設けるなどして、災いに備えました。大津市の多様な自然環境に寄り添う日々の暮らしのなかで育まれた知恵と技は、いまでも息づいています。

13 水と技

●風光明媚な琵琶湖の景観

琵琶湖の景観は古くから名勝として親しまれ、15世紀になると京都の文人たちによって「近江八景」が見出されます。明治時代以降は、琵琶湖の雄大な風景と閑静な土地が注目され、旧伊庭家住宅(住友活機園)、蘆花浅水荘、旧琵琶湖ホテルなどが建設されました。

●水の恵み

明治時代に完成した琵琶湖疏水は、水力発電や物資運搬など多目的に活用されてきました。とくに疏水を利用した蹴上発電所から供給される電気は日本最初の市街電車(京電)を生み出すなど、近代日本の発展に大きく貢献しました。

●自然との共生

たびたび起こる水害対策として、江戸時代に比良山麓の大物では百間堤と称される巨石の石堤が



旧伊庭家住宅(住友活機園)洋館(田辺町)



仰木の棚田

14

里山の暮らし と生業

●茶栽培と棚田

大石の山間部では茶の栽培が盛んで、坂本には最澄が唐から持ち帰った茶種を植えたと言われる日吉茶園があります。また、伊香立や仰木の山麓には大小さまざまな棚田が広がり、地域住民とボランティア・スタッフによって棚田の保全活動が行われています。

●山の神行事

山仕事の安全を願い、豊作を祈る山の神行事は、大津市全域で行われています。山の神行事では、1月ごろ、米粉で作った団子やイワシ、サバなどの魚を供え、勧請縄と呼ばれる注連縄を張って山の神を祀ります。

●木戸石・守山石とシシ垣

北部地域山間部から切り出される良質の花崗岩は、江戸時代初期から、木戸石・守山石の名で、大津はもとより、京都や湖東へと運ばれました。地元には木戸石で作られた石組みの水路や石灯籠などが残っています。江戸時代、比良山麓には獣害対策としてシシ垣が築かれました。荒川集落に残るシシ垣は、獣害対策、洪水・土石流対策を併用している点で、全国的にもめずらしいものです。



石山寺本堂源氏の間(石山寺提供)

テーマ6 文学につづられる 歴史文化

大津市は文学作品と縁深い土地です。琵琶湖の自然豊かな景観は、古くから人々の心をとらえ、詩歌や俳諧に詠まれ、物語の舞台として、さまざまな作品に描かれてきました。

15 歌と物語

●歌に詠まれた風景

比良の山、真野入江、志賀の山越、打出の浜……。『万葉集』に詠まれ、のちに近江の歌枕となった風景は、数多くあります。漢学者で歌人の小野篁を祀った篁神社、書家・小野道風を祀る道風神社など、小野氏ゆかりの神社も残ります。蝉丸の関蝉丸神社、源融の融神社、六歌仙のひとり大伴黒主の黒主神社、『古今和歌集』の撰者・紀貫之の福王子神社など、歌人を祭神とする神社が多いことも大津市の特徴です。



小野神社境内社 篁神社

●松尾芭蕉の足跡

松尾芭蕉は大津を第2の故郷とし、門人とともに多くの俳句を残しました。大津市来訪中は、国分の幻住庵や義仲寺の無名庵に滞在したといわれています。芭蕉の死後、遺言に従って義仲寺に葬られ、今も大津で静かに眠っています。また、義仲寺裏の亀ヶ岡俳人墓地には、芭蕉の門人たちの墓が建立されました。

●物語のなかの大津

紫式部は石山寺から望む湖面に映った十五夜の月を見て、『源氏物語』の「須磨」、「明石」の2巻を書きはじめたと伝わります。石山寺本堂の一角には紫式部が執筆した源氏の間が残っています。大津市は『今昔物語集』や『太平記』など物語の舞台として登場してきました。『平家物語』には、源(木曾)義仲と今井兼平の最期となる粟津の合戦が描かれ、能「兼平」や「巴」の題材にもなっています。



義仲寺

文人・歌人・絵師たちの創造力をかきたてる「近江八景」

江戸時代後期の浮世絵師・歌川広重は、近江の風光を愛し、二十数種類にのぼる近江八景シリーズを世に送り出しました。写真は縦版の近江八景で、画面上部には近衛信実が詠んだとされる和歌も添えられています。(大津市歴史博物館蔵)



栗津青嵐



石山秋月



比良暮雪

「大津市歴史文化基本構想」にもとづき、 歴史文化遺産の保存と活用に取り組みます

大津市には、指定・未指定を問わず、多種多様な歴史文化遺産が存在します。その一方で、その保存・活用めぐる課題もあります。市民のみなさんと力をあわせて、より効果的に保存・活用を進められるよう、次のような方針を定めました。



観光ボランティアガイド



市民向け講座(れきはく講座)

大津市の豊かな歴史文化を大切に守り、
活かしながら、次の世代に伝える



大津の歴史文化の魅力を底上げし、 さらに磨きをかけて、次世代へと伝えます

大津市の歴史文化の価値を次世代へと伝えるには、市民一人ひとりの「守りたい・伝えたい」という思いが不可欠です。歴史文化の保存・活用を効果的に推進するには、ふたつの取り組みが必要です。ひとつは、大津市の歴史文化の「魅力の

底上げ」をはかるために、市域全体を対象とした「価値の共有化・連携」。もうひとつは、歴史文化によりいっそう磨きをかけるための「戦略的な魅力の発信」です。この両輪を推進力として、保存・活用に向けた取り組みを展開します。

